

宇佐八幡宮と別府

中野 幡能

別府市は、むかし朝見郷といわれていました。七世紀半ばの大化の改新で律令制度が制定され、その制度により豊前の国、豊後の国というものが生れました。そして国の下に郡、郡の中にやがて郷ができます。豊後の国には八郡が生れますが、その一つが速見の郡で、この中に朝見郷ができたわけです。その朝見郷がちょうど今日の別府市とほぼ同じ区域なのであります。

「朝見」という地名の興りにはいろいろ議論があります。温泉の熱い水（アタミ）という説、海人族阿曇（アズミ）説がありますが定っていません。

奈良時代の終り頃になりますと中央の政治が乱れ、各地に反乱がおこり、郡の役所を焼き払うという事件がおきるようになります。それで何とか改革せねばということで、平安時代が生れてくるわけです。そのころ、日本の思想界に八幡信仰というものが興りまして、国の政治や経済にまで大きな影響を与えるようになりました。そのころに荘園の制度が生れます。天皇に代って摂政とか関白が政治を握るようになりますと荘園が次々とできてくるわけです。

朝見郷の中に最初にできた荘園は「竈門荘」です。これには二つの説があります。その一つは、通説として天平勝宝という年に聖武天皇より、宇佐八幡の弥勒寺の僧侶を養成する経費を賄う学分として与えられたというもので、壱田百町歩が寄進されたとする文書があります。ところが一説には、これが疑文書であるという説もありますが、まだこれには検討の余地があります。

このとき（天平勝宝）百町歩という墾田が朝見郷の中から弥勒寺に寄進されたこととなります。そして、この百町歩が平安・鎌倉・室町と中世にいたるまで荘園として続きます。これが「竈門荘」であります。

宇佐八幡宮は、神宮と弥勒寺つまり神宮寺が一緒になったお宮で、このようにお宮とお寺が一緒になるという考え方を最初におこしたのが宇佐八幡宮であります。そういうことで、弥勒寺という神宮寺が天平十年に今の境内に移ってきます。そのお宮に一番最初に寄進されたのが竈門荘ということになり、竈門と宇佐八幡宮は古くから大変深い関係があったわけであります。

宇佐八幡宮の荘園には、根本神領と称すの神領があります。つまり、豊前・豊後・筑前・筑後・肥前の五カ国にわたって十八箇所の荘園が寄進されるほど朝廷により厚く信仰されてきました。

その中に石垣荘という荘園があるわけですが、残念ながら何年何月に宇佐宮に寄進されたかわかりません。この石垣荘という荘園は、宇佐宮にとりまして非常に重要な荘園であります。平安時代の終わり頃になると、その石垣荘の人口が増加し、人々があちらこちらを開墾して耕地を広げるわけです。この耕地を「別符」ビユウとかベフと称しました。

この符というのは、税金を納めさせる一つの公文書で、本荘とは別の形で年貢を納めさせるためのものです。この別符（後に別府の地名となった）は、石垣荘の枝村を称したものであります。つきつきと荘園のなから外にでて開墾して耕地を荘園に抱えこむ、これを「加納」と呼んでいるわけで、いまの鉄輪が加納からおこったともいわれています。

最後に朝見郷ですが、もともと郷というのは国家が支配する公領で、荘園がいきわたると逆に公領がどんどん狭くなります。九州の公領の総面積はだいたい百拾数万町歩といわれますが、その中に鎌倉時代終わり頃まで、宇佐八幡・弥勒寺の広大な荘園が割り込んでいきます。

一方では、太宰府の安楽寺（太宰府天満宮）がどんどん荘園を増やしているわけです。そう言うことで九州の大半は宇佐八幡宮・弥勒寺・安楽寺領と荘園化してしまい、残りの僅かな土地を国が公領として支配することになるわけです。

公領は、大分県でも非常に少なくなってしまうわけで、朝見郷では、朝見川を中心とした山の手に近い一部分が公領として残ります。しかし、これも平安時代の終わりになると、この地の半分は、宇佐八幡宮の外宮の造宮のため、収穫高の半分は宇佐八幡宮に納めるということになります。これを半不輸領といっています。このようなわけで、純然たる公領ではなくなり、宇佐八幡宮の一種の荘園になってしまう。これで現在の別府市はほとんど宇佐八幡宮と結び付きをもつということになる。とくに、石垣荘は勅免の地と申しまして、天皇の許可がないとうごかすことができないという厳しい荘園で、天皇と宇佐宮に守られた権威度の高い荘園でありました。

荘園ができると、その土地の守り神として鎮守が生れてきます。竈門荘には竈門八幡宮、石垣荘には石垣八幡宮（古くは若宮八幡）が鎮座しました。平安時代の終り頃、朝見郷が半不輸領として宇佐八幡宮と関連をもつようになります。ここにも鎮守として八幡宮が勧請されているはずですが、現在の朝見八幡宮は、大友氏が鎌倉の鶴が岡八幡宮を勧請したという縁起になっておりますが、朝見が宇佐八幡宮に関する半不輸領ということから、あるいは宇佐から直接八幡宮を勧請したのではないかと考えられます。このあたり論議される問題でしょう。これらの八幡様は、それぞれ鎮守の神であるとともに、宇佐八幡宮による支配のための出先機関でもあるということにもなるわけです。

そうした中で、「勅免之荘」という極めて権威の高かった石垣荘で、鎌倉時代の終りに大きな事件が起きました。元寇の役で、朝廷は綸旨を出して、全国の神社仏閣に敵国降伏の祈禱を命じました。幕府も御家人などを督励して同じく神社仏閣に祈禱を命じ、とりわけ伊勢大神宮と宇佐八幡宮には、最高の礼をとり多大の荘園を寄進して祈禱したようです。ところが文永の役の前、大きな勢力をもって太宰府を脅かすようになった大隅国の正八幡に、幕府は大神宝を奉納するため、「勅免之地」の別なく各荘に課税や課役を負担させました。その中に石垣荘も含まれていたわけで、豊後国の守護職大友頼泰が奉行となり何度も督促をしました。しかし、石垣荘では地頭代の迎西という僧が断固としてこれをはねつけました。石垣荘は「勅免之地」であり宇佐宮の若宮造宮の課役を受けもつこと以外一切の課税・課役はご免

蒙るといわけである。

大友頼泰は、正八幡大神宝官使を伴い国府の役人とともに、朝見で人夫を徴発して石垣荘に乗りこんで来ました。石垣荘では迎西が何百人という百姓を集めて立てこもり、大神宝官使を襲い、頼泰の家来達の冠を取って投げ捨てるなど乱暴狼籍を働き、一行を追い返してしまったということです。

石垣荘や石垣八幡宮についてまだ分からない問題が非常に多いわけです。石垣には大宮司・宮司という地名が残っています。やはり権威ある姿をもっていたのだなあと思います。それとも一つ石垣八幡宮は神宮寺をかかえております。これが円通寺です。今は別府大学のキャンパスになっています。かつて円通寺にはかなりの高僧がいたようです。鉄輪に一遍が来たことはおそらく本当だと思いますが、訪ねて来た最初の目的地は円通寺であろうと思います。この寺は当時の有識者あるいは名僧・高僧達が続々と訪れたであろうと思われる。円通寺は大友時代末期まで続きます。こんな重要な神宮寺を備えた八幡宮を擁する石垣荘は、国家権力にたいして抵抗しうるだけの大きな力をもっていただけと思われる。

もう一つ竈門八幡宮の問題があります。竈門荘は弥勒寺の最初の荘園です。だから、初めから神仏混淆という形ができていただろうと思います。現在は排仏毀釈で詳しく分りませんが、竈門八幡宮の神宮寺は非常に面白い形態をとっています。竈門八幡宮の神宮寺は、六坊といっています。記録によると、神宮寺は、神宮寺・長福寺・光明寺・自心寺・多応寺・観音寺・養徳寺で七つの寺号を持ったお寺があります。

長福寺は溝辺さんのお宅として残っていますから神社のふもとにあります。光明寺は内竈にあり、他心寺は別府女子短大の東側にあります。多応寺という寺を詮索しておりますと、江戸時代に書かれた「豊陽古事談」という本に羽室山多恩寺というのがでてきます。これを訪ねると、いまは、野田羽室を離れてコンクリートの建物にかわっています。長泉寺と大変深い関係があるわけです。羽室山の多恩寺が復活されて朱湯山長泉寺に発展したのではなからうか。この

長泉寺という寺は、朝廷の信仰が厚く、皇太子の病気を癒やしたなどいろいろ權威に満ちた縁起が伝わっています。どうやらこれが多応寺と称する神宮寺の一つではないかと思えます。もう一つは、亀川平田にある観音寺ではないでしょうか。この寺は、いろいろ縁起をかかえておりまして、大友持直が再興したと伝えられています。この観音寺も神宮寺であろうと推定しています。

竈門八幡宮の神宮寺は、六坊といひながらそれぞれの寺号を持った六の寺があるという在り方がたいへん珍しい。それらは、それぞれ重要な莊園の名に建られ、名主たちに深いかわりを持ちながら、八幡宮の神宮寺として祭典に従事していたのではなからうか。竈門莊に莊地を持った八幡宮が、坊を各地に分散させ、坊と称しながら一つの独立寺院のような形をかたちづくりながら、竈門八幡宮の祭祀に当たっている。おそらく非常に固まった在地の強力な力を示すという、神宮寺の経営をしていた非常に変わった神宮寺であったと思えます。

この別府というところは、古代から宇佐八幡宮と深い関係をもつとともに、まことに何か平凡であるようで、まことに平凡ならざるものをもった地域であったといえましょう。

(記念講演要旨 文責事務局)

別府の行政事情 (明治前期)

大野 保 治

(1) 明治当初の別府のこと

江戸時代の別府は、入江に沿った温泉の湧き出る月並みな農漁村であった。別府が温泉街として発展を始める

のは、明治に入ってからである。交通上の諸制限が撤廃されるに及んで、別府を訪れる入湯客はしだいに増えていった。